

音楽プロデューサー協会 20年

20th anniversary
Music Producers Association Japan

「個」の21世紀をスクラムで前進

ジャーナリスト（元浜離宮朝日ホール支配人）志村嘉一郎

マネ協の不正経理が発端

音楽プロデューサー協会が誕生したきっかけは、日本音楽マネージャー協会の不正経理問題だった。

22年前にマネ協の執行部交代があった。それまでの専務理事だった家永勝（家永音楽事務所代表取締役）が、1,000万円以上の預金が入ったマネ協名義の預金通帳と印鑑を、新執行部に引き渡した。ところが、1年後の協会決算書には、引き渡したはずの1,000万円強の金が消えていたのである。横須賀芸術劇場の会議室で総会を開き、その使途を追及した。新執行部の説明は、「海外調査費に使った」など要領を得ない回答に終始。このため、執行部不信任決議案を出したところ1票差で否決され、結局1,000万円問題は、うやむやになってしまった。

この動きに不信をもち、マネ協から独立して別の新しい組織を設立する機運が出てきた。ちょうどそのころ、梶本音楽事務所の副社長だった薮田益資が事務所を退職、氏の卒業パーティを有楽町マリオンで開催することになり、クラシック関係者が100人ほど集まった。会合でマネ協の不祥事が話題となり、薮田ほかパーティ参加者からも新しい協会に賛同する人が続出した。こうした中で設立されたのが、当協会である。

数回の準備会合を行い、2000年4月に発足した。役員には代表幹事に家永、幹事に神田正美（東京ニューフィルハーモニック管弦楽団アドヴァイザー）、佐藤地平（東京ニューフィルハーモニック管弦楽団代表取締役）、鈴木昭良（鈴木アート・エージェンシー代表取締役）の3人が就任した。設立時の会員は32人で、役員のほか主な会員は在原勝（東京プロムジカ代表取締役）、上野喜浩（すみだトリニフォールプロデューサー）、小尾旭（ミリオンコンサート協会代表取締役）、神原芳郎（神原音楽事務所代表取締役社長）、貴田直美（音楽企画ドルチェ代表取締役）、佐藤修悦（コンサートサービス代表）、志村嘉一郎（浜離宮朝日ホール有楽町朝日ホール総支配人）、高田唐吉（芸術文化センター代表取締役）、戸部由起子（エクレジア・アーツ取締役）、内藤克洋（ショパン代表取締役）、中根俊士（東京アーティスツ代表取締役）、広瀬光康（新演奏

家協会代表取締役）、薮田益資（ミュージック・シオーネ・ジェーピープロデューサー）、渡辺豊（アート・センター代表）、杉山富士男（沼津楽友協会クラシックサロン事務局長）たち、である。

会員資格は個人

家永代表幹事は、会報の創刊号で音楽プロデューサー協会の設立について記した中で、協会の組織や目的について、次のように述べた。

- ①会員の資格は、会社など団単位でなく、個人とする。
- ②個人の音楽プロデューサーが一堂に会して、音楽文化の創造と普及などに英知を結集し、我が国の音楽文化の発展に寄与することを目的とする。
- ③プロデュースという言葉を幅広く解釈し、音楽事業関連者だけでなく編集者、評論家、大学のアートマネージメントの先生、ジャーナリストなども会員とし、違った立場から議論していく。

毎月1回例会を開き、情報交換、外部講師による研修、会員講師によるノウハウ公開など、時に応じたテーマで例会を進めた。最初の数回は、有楽町マリオンの会議室で開いていたが、会員が増えてきたため上野の東京文化会館の会議室での開催が定着した。会員の構成も、ベテラン・中堅・若手と老中青がほどよく混ざっており、新しい問題も提起されたり、難しい問題解決のノウハウも、ベテランから体験が披露されるようになってきている。海外からの招聘などについても、国際情勢やEUからの英国離脱問題、為替の行方などの研究発表も行われている。会議は午後2時から5時まで。終わるとアフターファイヴとなり、上野公園西郷さんの下の中華料理店で懇談となる。毎年、新年パーティを開催、外部の音楽関係者も参加して交歓。七月には親睦旅行を開催し、温泉につかりながら夜遅くまで熱論が続く。

個が活躍し重視される時代に

『昨年までの20世紀は、西洋音楽が本格的に日本に定着した世紀だった。今年からの21世紀はITの時代で、

世の中がますます速い速度でめまぐるしく変化してゆく。新世紀の音楽事業の世界も、組織の時代から「個」が活躍し重視される時代に流れが変わってくるのではないか。

いま、日本国中いたる所に設立された文化ホールは、決して円滑に運用されているとはいはず、運用方法やアートマネジメントなどが、課題となっている。

家永は、今世紀初頭、会報創刊号で今世紀の音楽事情をこのように予想した。同じ号で、千葉和廣（東京都教育委員会局務担当部長・全国国公立文化施設協会事務局長）さんも、21世紀の音楽事情を次のように分析する。

『20世紀という「競争」を基軸とした<モノ>の時代は終わりを告げた。21世紀は「融和」を基軸とする<ココロ>の時代として歩み始めるであろう。クラシック音楽に親しむ人々は人口の1%程度といわれて久しい。娯楽領域の多様化、この国における教養教育の放棄などが理由として喧伝されているが、音楽家と聴衆をつなぐ我々（音楽事業所やホール、評論家、マスコミなど）の責任はどうであろうか。聴衆拡大へ向けて意欲的な試みもなされるようになったが、今なお著名外国人アーティストの偏重や旧態然とした企画の横行が著しい。

私は、このこと自体の原因の大きなものとして、「組織の弊害」があるのではないか、と考えている。これまでのように社会全体が右肩上がりの成長を価値としている時代は、大量消費・大量生産が成長の指標であり、それを保証する効果的・合理的システムとして「組織」は極めて有効なものであった。しかし同時に「個人」が根源的に持つラジカルな創造力の発揚を期待している。音楽界もかくあらねば、と思う。感性・感動という極めて個人的な事業と向き合うこの領域こそ、個人が時代を感じ時代に問いかければ、発展はなく緩慢な死を迎えるのであろう』。

急変している現実

この20年間、音楽業界はどう変わったか。

- ①公共ホールや民間ホールが、次々と閉鎖された。自治体の財政逼迫、企業の経営不振などから。
- ②指定管理者制度により、公演数の減少と資金不足で、「クラシックより落語」などの風潮。
- ③大手音楽事務所3社に異変が起き、1社は閉鎖、1社は縮小、1社は経営権を譲渡した。この中から、個人ベースの音楽事務所がいくつも独立した。
- ④中小音楽事務所の閉鎖・倒産。
- ⑤海外からの大規模公演招聘事業の減少。

⑥ファン層の高齢化と子どもづれファンの増加などで、夜間より昼間の公演が主流となってきた。

などが、あげられる。まさに、両氏が20年前に予想したことが、現実になっている。「組織」でなく「個」の世紀が始まっており、クラシック公演をどう生き残せたらよいか。

変化激しい時代続く

21世紀は、5分の1が終わり今年から20年代になった。年末年始には予想もない事件が起きている。日産自動車元社長のゴーンが関西空港から密出国したさい、音楽関係の音響機器の空箱が使われ、音楽界には悪いイメージとなった。年始には、米国がイラン革命防衛隊司令官を暗殺、中東がきな臭くなってきた。56年前の東京五輪後には、大不況に見舞われた経験がある。おそらく今年の五輪後には、日本だけでなく国際的な経済変動が起こるかもしれない。「世の中に不況風が吹けば、すぐにクラシックコンサートのお客が減る。世の中の景気がよくなても、数年しないとわれわれの業界の景気は戻らない」。神原社長の言葉が耳に残る。

「個」の時代はこれからも続き、むしろ色濃くなろう。クラシック関係者が生き残るには、スクラムを組んでトライに進む必要がありそうだ。

（会員は敬称略・役職は当時）



プロデューサー協会会報

創刊号表紙

2001年3月発行

初代代表幹事

家永勝の挨拶で始まる



音楽ビジネスは頭と足で

クラシック・ニュース プロデューサー 蔡田益資

その精神を受け継ぐような思いで仕事に取り組んできた。結果、40年にわたって彼とともに仕事をした事になった。このような考え方がすべてのベースになっている。

はじめにこのような一文をご紹介する。
私がカジモトをリタイアの時に、それまで35年くらい仕事の仲間だった、金尾弘昭さんが私によせたものだ。
「ご苦労さまでした。仕事なし（あまり多くなかったですよね）、金なし、アーティストなしの時代から、やっとここまで来ました。
本当にご苦労だったと思います。とくに私のようなクラシックのクの字も知らなかった者が入社し大変だったことでしょう。いろいろありがとうございました。もうすこしで私も・・・・」

彼は船場の織維会社から転職してきた人物です。船場といえば「大阪商人」のいちばん厳しい活動地点で仕事をスタートさせている。

1962年にカジモトが東京に進出して、スタートして数年後に入社した人である。

私も父は呉服商として一城を築き上げ、その背中を見て育った。

私たちはともに大阪商法が身体に浸み込んでいた。

相手良し自分良しの大坂商法

「大阪商法」というと残念ながら、一般的にネガティブな面しかとらえられていないと思う。

大阪商法の姿は、取引相手とお互いにハッピーな関係を持つことが大切である。取引相手とともに栄えてゆくという基本的な考え方方に立っている。

その考え方方が商取引の大切な部分である。無駄を排して実利を追求するという精神である。

それを誤って、「ぬけめがない」とか「狡い」という間違ったとらえ方をしている。それは枝葉の問題で、基本を大きく誤解しているのは残念だ。

私が1962年に上京後、業界を見て驚いたのは同業者の荒っぽい考え方であった。大阪ではそのような考え方で、仕事を進めるのは想像もできることだった。お客様を大切にするという考え方方は商売の基本である。

梶本尚靖さんのやり方を見るとまさに父の姿に重なり、

1960年代の聴衆が求めるものは非常に保守的で、新しいアーティストに対してほとんど振り向くことはなかつた。良く知られているアーティストは聴衆が集まるが、そうでないとほとんど聴衆動員は出来なかつた。

外国人演奏家でも、国内演奏家でも同じ事が言えた。1962年にカジモトが東京事務所を開いた時は、後発として出てきたので、有名な演奏家はほとんど他社に占められていた、自分で開発していく以外に道は残されていなかつた。

その頃の音楽コンクールといえば毎日新聞とNHKの音楽コンクールが一番知られたコンクールとして君臨していた。その関係者との接触をはかり、関連の事業に協力をして道をひらいた。また出演した演奏家とのコンタクトで多くの接点をもつた。教えた先生方にもいろいろ繋がりをはかる等の作業も大切だった。

苦しかった東京進出直後

新しいアーティストをどのようにすればビジネスの対象になるか、それしか考えられなかつた。

東京に進出以来10年くらいは無我夢中で励んだ時期が一番苦しかったのではないかと思う。若い演奏家の仕事を見つけながら、その人の望む道を拓き、キャリアを作ることに貢献するか、人目につかない地味な努力しかない。忙しさと反比例して、その収益性は極めて悪く、それをカバーするために興行による収支を上げ、バランスをとるほかなかつた。

指揮者の若手等も同様の作業でその分野を徐々にひろげていった。全国的なオーケストラの増加や、都市部のオーケストラが複数成立という背景の変化で指揮者の需要は高まつた。その結果は時間が経つと、ある程度多くの指揮者の契約を増やしていくことが良い効果を生んだよう思う。

指揮者の仕事を増やすとともに、オーケストラの情報は指揮者を通して得られることが多くなつた。その結果、ソリストたちの仕事を作ることにも大きく役立つた。

書いてしまえば簡単だが、ここまで來るのに 20 年くらいは費やしたような気がする。

大阪万博から花開く

海外からの招聘事業は 1970 年くらいまでは、円価 360 円の固定相場の時代であった。ドル枠が規制されて、どんな招聘事業も困難な時代だった。新芸術家協会（新芸）、アートフレンドなどのルートをたどっての一部の業者しか招聘できなかった頃だった。放送局、新聞社などはドル枠を持っていたので、そこでの招聘はあった。

大阪万博と前後して、急に規制がはずれ 1970 年が招聘事業の元年といえる。その後いっせいに花が開いたような様相をみて、今日に至る。

興行について考えてみる。興行は水ものである。気を抜くとすぐ赤字を作る。とにかく一円でも収益を出すように採算点を考えて、開催するしかなかった。

1970 年以前は招聘事業といえるような状態ではなかった。それでもその規制の枠内で招聘を行ったが、利益の出る幅は限られていて、少しづつではあるが力を蓄える場とした。

大ホールで勝負する場合も細かく目配りをして、水をこぼさない様にしないと、なかなか利益を出すことは困難であった。

チケットの販路も細かく眺めて、以後の公演で売り上げ実績があれば、その販路を生かすように務めることが大切である。一度取引のあった顧客はかならず再度の購入対象として、しっかり相手をつかんでゆくことである。

メディア関係者が情報源

一方、広報、メディア（新聞、雑誌、業界紙）との関係をどのように整えて、いかに告知すべき内容を適切に受け渡しできるようにとはかった。

今日と事情が違ったのは、海外の演奏家の情報は向こうの雑誌、新聞しかなかったが、新聞、雑誌はほとんど船便で運ばれて來たので海外の事情を知るにはかなりズレがあった。

それらのメディアの担当者、雑誌等に執筆するライターとも情報交換も大切な作業だった。彼らは大切な情報源であった。

レコード会社も同じような作業を行っており、その辺は共通したものがあった。

今日のインターネットメディアの即時性を考えると、全く考えられない夢の世界である。新聞やテレビの報道より早く情報が届く時代になった。今後、ますます SNS 等のメディアの利用を進めるべきである。

一例をあげると、自分がかかわっているフェイスブックの「クラシック・ニュース」では一つの情報で、うまく拡散出来れば、数日のうちにリーチ数を 5,000、10,000 とカウントできる。

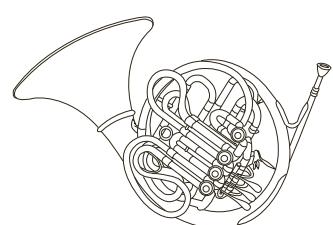
金をかけずに宣伝効果

宣伝に関して、新聞、雑誌広告、チラシ制作とその配布、ポスターの配布、などが考えられる。現在と事情の違いもあるがやはり細かい目配りが大切である。

チラシ配布は印刷費のコストが下がって、単にばらまくだけで宣伝をしているような錯覚を持つのではないだろうか。きめの細かいチラシ配布によって、興行を成功させなくてはならない。適所にチラシの散布場所を拡大してゆくことが重要である。出来るだけお金を掛けないで手渡してゆく。チラシ一枚がキップ一枚に相当するというくらい原価意識をもつことが大切である。

そして、新聞広告の有効利用、かつて朝日新聞で、2 段、1 cm で約 10 万円の時代が長くあった。掲載の期日なども有効な時期を考えて手配した。現在は思いもよらないスペースと、掲載紙面を見るとかなり有利に利用できそうだ。

お金を掛けないで効果を生む広告出稿を考えることが、今後ますます重要な時代が到来する。





大阪の音楽界で 50年

「東京の二番煎じばかりではケッタクソ悪い」

—大阪アーティスト協会 会長—N P O 法人関西音楽人クラブ理事長 黒川浩明

まず始めに、協会の会員でありましたヴォイシングの白神さんが、2018 年のお正月に急逝された事に対し、同じ大阪で仕事をしてきた仲間としてお悔み申し上げたいと思います。白神さんがプロデュースされていた「狂言風オペラ」の公演が、2018 年と 19 年の 3 月に関西ほか、全国でもかなりの本数、決まっていました。奥様の弘子さんがそのまま引き継いだ訳ですが、招聘もあり、伝統文化もありで、やはり大変だということで、当日の受付などを私共が手伝わせて頂きました。「私はようわからへんのです～。」と言いながらも、彼女はよくやっていらっしゃいます。弘子さんから、「プロデューサー協会の皆様には大変お世話になりましたので、よろしくお伝えください。」ということでしたので、とりあえずご報告しておきます。

改めまして、今回はお招きいただきましてありがとうございます。私もお陰様で 74 歳になりますて、人生を振り返りながら、そろそろ仕事はフェード・アウトの方向やな、なんて思っておりました所このお話を頂きましたので、せっかくなのでこれまでの人生を振り返って辿ってみようと思いました。そうしましたら、この音楽の仕事を半世紀やっている事に気が付いたのです。

車の営業から梶本へ

学生の頃は音楽が好きではありました、特にクラシックが好きな訳でもなく、就職は自動車会社のディーラーで、池田にある営業所で働いていました。スバル 360 とか、1000 とかそんな時代です。そこで一緒に働いていた熊本さん（元梶本音楽事務所・クラシックハウス）が音楽好きで梶本音楽事務所（当時は大阪）に転職したのです。その後、熊本さんに誘われて私が梶本音楽事務所の戸田さんに採用されたのが、1969 年です。それまでは梶本に勤めていた人というのは入社しても次から次へと辞めて行く人ばかりで、すぐに病気になる人もいたそうで、能力なんていう事は全く関係なく、せめて半年でも長続きしてくれる人がおらへんかな、ということで、単に丈夫で元気ということだけが取り柄だった私が雇われたのだと思います。始めは「半年でいいから」と言われましたが、そこから気が付けば 50 年もの間、この世界で生きて来てしまいました。

入社した始めの 1 年は大変で、あれやこれやどこなしでいるだけであつという間に過ぎていきました。翌年から、フェスティバルホールで行われた大阪万博の「エキスポ・クラシック」という公演の運営を担当する事になりましたが、始めのほとんどは場内整理がメインの仕事でした。場

内整理をしながら多くの公演を聴く事ができたり、肌で感じる事ができたのは、今となっては大きな財産になっていると思います。今やその当時のことを知っている人も少ないかと思います。

合理主義か義理人情か

梶本音楽事務所では、社長の梶本さんや戸田さんには大変お世話になりました。出来の悪い社員だったと思います。本当に何度も、梶本さんに怒られたり、トラブルを起こしたりしました。ただ、私は怒られても絶対妥協しなかったのです。自分の生き方にそれなりの信念を持ってやっていました。梶本さんには「君のやり方はおかしい。間違っている。」と言われても、「そんなことはありません。その言葉、撤回してください！絶対に私は間違っています！悪い事をやっている訳ではないのです。考え方の違いは当然ありますし、僕は梶本さんのお考えも理解できますが、『間違っている』という言葉はおかしい！」というように言ったこともあります。そんなことを言ってしまうくらいですから、良いのか悪いのかよくわからないような社員だったのかもしれません。仕舞いには、「君も強情やなあ」と、梶本さんの方が折れてしまったこともあります。

一番印象的だったのは、小澤征爾指揮、桐朋オーケストラがフェスティバルホールで公演した時の事です。1 月、大雪で新幹線がだいぶ遅れてしまい、会場にお客様が皆着席している状態になってから団員が到着しました。着くなり全員私服のまま楽屋にも寄らず舞台に上がってもらい、その場で楽器をケースから出し、お客様がいる前で少しのリハーサルをしてそのまま本番に入った、なんてことがありました。当日はそれは大変な事でした。

この公演には「関西桐朋会」の会長さんがチケットの販売にとても協力してくださったので、後日挨拶に行こうと思っていましたし、会長からもチケット代の売り上げがあるので、私に取りにくくるように電話が掛かってきました。電話もありましたから、「挨拶がてら集金を行ってきます。」と出て行こうとしましたら、熊本さんから「行く必要はない。君は単なる兵隊だから、やる事だけやればよい。挨拶は梶本さんの仕事だ。」と言われたのです。人にチケットを売ってもらうよう頼んだら、御礼を言うのは当たり前だと思っていたのに、ちょっと感覚が違ったんですね。ですからその後は、タイムカードを押して「もう今日は退社します。」と言って、勝手にご挨拶と集金に行くようにしました。

やはりこの世界は、特に関西人は義理と人情で成り立っているような所は実際にあると思うのです。その当時お付き合い頂いた方は、今でもお付き合い頂いている方も多い

です。そういう事を大事にするような方々が、お客様として私に付いてくれたのだと思います。梶本さんの徹底的な合理主義的な部分は、ある所では必要かもしれません、それでは難しい事も多くあると思います。それが梶本さんに相容れなかった部分だと思います。とはいっても、いくらやりあっても会社をクビにするような事はなかったですから、懐の深い方だったのですね。結局、梶本には 10 年間も務めさせて頂きました。その時の 10 年があるので今の私があるのだと思います。

大阪アーティスト協会設立

30 歳を過ぎた頃、「人生このままでいいのかな?」という迷いが出てきました。そこで梶本さんに「会社を辞めたい」という話をしましたところ、強く引き留められました。その頃は喧嘩ばかりしていたので、まさか引き留めてくれるなんて思っても見なかったので、少しひっくりもしましたし愛情も感じましたが、男が一度言ったことは引っ込められませんから、辞めてしまいました。

梶本を辞めた後は、このクラシック音楽の仕事自体を辞めるつもりでいたのですが、「神戸市がオーケストラを作るからその事務局をやってくれませんか。」と声を掛けられ、1979 年、神戸市交響楽協会の事務局に入る事になりました。この業界に引っ張り戻された、という感じです。1980 年、神戸市交響楽協会で神戸フィルハーモニックを設立後、退任しました。

東京の新芸術家協会で幹部をされていた中筋さんが、当時神戸コンサート協会をやっていらっしゃいましたので、私は神戸コンサート協会・大阪事務所を開設し、そのお手伝いや大阪でのコンサートのマネジメントを始めました。その後の 1985 年、神戸よりも大阪での公演の数が多くなり、神戸コンサート協会・大阪事務所を発展的に解消し、大阪アーティスト協会を設立しました。

以前、大阪で委託公演のマネジメントをするところは梶本くらいしかなく、梶本でマネジメントをしてもらうために、演奏家が菓子折り持つて頼みにくるような事もありました。ですが梶本でもすべてを受けられる状況でもなかつたので、そのような演奏家の委託マネジメントを大阪アーティスト協会としてやり始めました。それをいくつかやっていく内に、一人が梶本から移るとそのうわさや紹介からお弟子さんなど何人もが移る、という事になっていき、大阪での委託マネジメントが増えていきました。後になって梶本さんからは「こんなに演奏家皆が梶本から移っていくとは思わなかった。ショックだった。」と言われました。合理主義よりも人情だったのでしょうか。梶本さんも「流れ」を止められなかったんですね。

阪神淡路大震災チャリティ

大阪アーティスト協会の仕事をしていて一番印象に残っている事は、やっぱり阪神淡路大震災です。震災のあった 1995 年は、大阪アーティスト協会を設立してちょうど 10 年目の事でした。設立して 10 年になる少し前から、10 周年の記念に何かイベントをやりたいなあ、と思っていた矢先の 1 月です。ですから 10 周年とはいえ、すぐに記念の公演などができる状態ではなくなっていました。

震災は、大阪にはそこまで影響はなかったですが、ご存知の通り神戸は壊滅的でした。その時、東京のオーケストラ連盟から関西のオーケストラユニオンに、「こんな時だからこそ、震災からの復興支援コンサートをしませんか」と打診がありました。ただ現実問題として、大阪のオーケストラも全てが皆、打撃を被っていたので、「やりましょう」なんて簡単に手を上げてくれるところはありませんでした。ですが、「やっぱりやるべきだ!」ということになって、オーケストラのユニオンの方達が動き出しました。だったら黒川の所に頼んでみませんか、と言ってもらい、彼等が大阪アーティスト協会の事務所に来ることになりました。私は比較的律儀な人間だと思っていますので、「このような、『全関西』というようなコンサートを行うのであれば、やっぱり梶本さんにお願いするべきですよ。梶本さんに行ってください。」と言って、その場では一旦お断りしました。そうしましたら、しばらくして皆こちらの事務所に戻ってきました。

「どうしたの?」と尋ねると、「梶本さんに断られました」と言うのです。これは後でわかった事ですが、当時外国から演奏家を招聘したりオーケストラを使って公演を行うような事務所にとっては、ユニオンというのは「天敵」とまではいかないにしても、少し敵対意識というか、オーケストラを使う時に運営のしにくいような所があったようです。それで大阪アーティスト協会で、応援というか励ましのコンサートを、その年の 3 月 13 日に行う事になりました。皆様からの義援金は最初の 1 回目で 1,000 万円くらい集まりました。その後は毎年 1 月に、計 6 回にわたって行う事ができ、6 回で 5,000 万円強集まりました。それはもちろん全て寄付させて頂きました。

その公演にはたくさんの有名な演奏家が協力してくれました。朝比奈隆、小澤征爾、井上道義、岩城宏之、小林研一郎、トーマス・ザンデルリンク、辻久子、鮫島有美子、千住真理子、永井和子等々、挙げたらキリがありません…そして関西のすべてのオーケストラ。言いきれませんが、とても多くの演奏家が出演してくれて、そして協力して公演ができたという事は、私にとっては本当に良い財産になっています。

その第1回目の「励ましのコンサート」の後、同じ年に会社の10周年ということもあり、「やはり我々だけでも何かやっていこう」と思い、「若手演奏家による10回のリサイタル・シリーズ」を1年間にわたり開催しました。これは榎本にいた時の経験でできたのですが、震災のあつた大変な時にこのような記念企画を行った、ということで、企画自体は普通のコンサートですが、毎日新聞や読売新聞が記事として取り上げてくださり、私のインタビュー記事なんかを載せてくれました。

他には、1997年から地元アーティストによる大阪唯一の夏の音楽祭「サマーミュージックフェスティバル大阪」を開催したり、2009年からは「夏祭りなにわなくとも室内楽」と題した公演を、ザ・フェニックスホールで開催しています。もちろん、委託の演奏会も引き続き行っており、現在は年間約80数件の公演を行っています。

そんなこんなで、大阪ローカルの「ローカルマネジメント」の範囲の中でできる事、やれる事を、大阪アーティスト協会としてやってきました。ただそれだけなのですが、お陰様で新聞や雑誌などにも掲載して頂く事ができました。

関西音楽人クラブ

そんな中で我々は、数少ない大阪のマネジメントとして、昔の榎本さん程ではないですが、ある程度は音楽界に牽引力を持ってやっていこうと思っています。その一つが関西音楽人クラブです。

関西の音楽家、演奏団体、ホールなど、音楽を生業としている人達を中心とした団体で、もともと関西の音楽評論家の故日下部吉彦さんを代表として、年に1度新春パーティーで集まるだけの会でした。毎年毎年、参加者の募集もありますし、赤字を出しながらやっていましたので、弊社も忙しく、一度パーティーを行わなかった年もありました。すると、「これだけ長く続けてきたことをなんでやらへんねん！」ってクレームの電話が掛かってきました。こっちにしてみれば「どんだけ金と人を使ってきたと思うとんねん！お前に言われる筋合はないわ！」とは思いますが、そもそも言えません（笑）。それだけ皆さんから期待されていて、せっかくここまで歴史も持つてやってきて、関西ではある程度の認知もされてきた団体を辞める訳にもいかないし、年に1度の新春のパーティーをやって、「また1年がんばりましょな～。」と言って終わってしまうだけでは能がりません、という事になり、「ほなら、黒ちゃん、ちゃんとした組織作れや。」と日下部さんに言われまして、2018年の6月付でもって、NPO法人として立ち上げ直しました。

その手続きをやっている段階では日下部さんが代表だっ

たのですが、「さあいよいよ認可が下りる」という段階で、日下部さんが亡くなってしまったんです。そこでその後の代表者を、という時になって、本来なら運営の立場でやるものどうなのかな、とは思ったのですが、「黒川さんやつたら、いろんなジャンルや立場の音楽家のの人達と等間隔でつきおうているから」と頼まれまして、今は私が「理事長」という形になっています。会員は250人くらい集まりました。

東京に追いつけ

そういえば日下部さんは、パーティーの初めに毎回挨拶をするのですが、毎年同じことを言われるので、「私は富士山が爆発するのを待っています。富士山が爆発して西風が吹いたら、火山灰がみな東京の方に行って東京が大変な状態になります。そうなったら、私達の出番が出てくるかもしれません。それまではがんばりましょう！」という訳のわからない話をしていました。2017年末だったかな、結局91歳で亡くなられましたが、関西のクラシック音楽業界に大きな功績を遺した方だと思います。こんな方は今は出てこないでしょうね。

この会も今後はもう少し大きくというか、活発にしていきたいな、と思っています。いつまでも「東京の二番煎じばかりやっていたのではケッタクソ悪いやないかい！」ということで、追いついて抜かす事は出来ないかもしれません、「何とか追いつこうや」ということを合言葉のようにしてやっていこうとしています。

関西の音楽界というのは、この頃ものすごく小さいパイになってきています。演奏会をやって音楽雑誌を見ても、演奏会評が載っているのはかろうじてオケの演奏会。ましてや個人のリサイタルの演奏会評なんていうのは皆無に近い状態です。リサイタルを開催する人はいったい何のためにやっているのか、もちろん自分自身のスキルアップの為、という事もあるのでしょうか、以前の様に音楽大学が健全な頃には、リサイタルを何回やったら非常勤講師が常勤講師になって、もう少しがんばったら助教になって…、というような階段もあったのですが、今やその道もまったくありませんし注目もされません。新聞でリサイタルの紹介もされなければ評論家も来ません。音楽雑誌も注目していない。ということでやや負け犬根性になっています。ですから空元気かもしれません、関西の音楽界を盛り上げるべく、まずは関西音楽人クラブを盛り上げようと思っています。

会費無料で会費が集まる

このクラブは現在会費を取っていないのです。会費を払わなくても会員になれます、任意で、「良かったら、寄

付してください」というお願いのみ、皆さんのお寄付金のみで運営しております。そんなお願いのみで（2019年12月現在）240万円も集まりました。一人一人は数千円とか、高くて1万円程度です。それだけに、それなりの意識と期待を持ってこの会を応援しようとしてくれているのだと思います。ゆくゆくは自分たちに何か恩恵があるかも、と思っているのかもしれませんね。

今後、まずは若い音楽家を支援する事から始めようと考えています。いざみホールがそれに賛同してくれて、関西音楽人クラブが主催する音楽家の演奏会をホールとして支援してくれることになりました。また、関西の音楽情報誌を作り、関西の公演の批評でもコンサートレポートでも良いので載せていただきたい、という話もしています。今の音楽雑誌はどうしても関東の情報ばかりになりがちですから、関西の情報を発信できるものがあれば、と思っています。それ以外にもまだ少しづつですが影響力を与えつつあるので、この関西音楽人クラブを私の、大阪アーティスト協会の、一つの大好きな仕事にしたいと思っています。

その関西音楽人クラブの運営をさせてもらったのが、関西の中で良い人間関係が作れたきっかけになりました。昔の樋木さんや日下部さんに比べれば、どうしても「小粒」というか、小さい事しかできませんが、なんとかやって行きたいと思っています。

きびしい関西の音楽界

大阪では、他にコジマ・コンサート・マネジメントがありますが、大阪コンサート協会も今は無くなってしましました。あとは大阪アートエージェンシーという会社がありますが、シンフォニーホールの協力団体のような事をされているようです。関西では兵庫県立芸術文化センターが流行っていますが、オケの経営もそうですが、ほかのホールなど、厳しい経営の話しか聞こえてきません。京響と兵庫芸文くらいでしょうね、まだ予算がありそうなのは。とはいえ、兵庫芸文のホール利用率にも陰りが見えて来たようですね。そのくらい、関西の音楽界は厳しい状況にあるのだと思います。

最近増えて来つつある、「世の中の流れは平日のマチネかな～」なんていう話はしていて、どこも注目はしているようですが、やっぱり「安全パイ」というか、週末の夜か土日のマチネか、という事にはなっているようです。いざみホールは、比較的平日マチネを模索している方かな…。東京ではどうでしょうか？我々が踏み切るには、まだまだ相当な勇気が必要です。

ただ大阪は本当に厳しい状況です。堺に新しいホールができまして、それはなかなか良いホールなようです。始め

は良いと思いますし、大阪の歴史を考えたら堺というのは重要な所ではありますが、少なくとも今の大阪の状況を考えたら、関西の音楽界を引っ張っていくような、大阪をどうこうするような事はなかなか厳しいのではないかとは思います。大阪のお客さん、というのは大阪市内ではなく主に阪神間、というのが、クラシックのお客さんには多いので、その方達を堺まで引っ張っていく、というのはなかなか難しいでしょうね…。堺市内のみでホールを満席にできるようなクラシックファンがいるかどうかもわかりませんし、関西の音楽界に一石を投じるほどにはならないのではないかと思っています。もう少し景気の良いような事になると良いのですが。大阪のホールが神戸や京都と連携していくような事にもなっていないので、各地のホールやオーケストラ、マネジメントが連携していけば、もう少し良い事もできるのではないかと思います。ただ単なる仲良しごっこではなかなか進んでいかないので、誰かが強いリーダーシップを持ってやっていかない事には難しいかもしれません。関西音楽人クラブがその一端を担えればとは思います。

社会貢献

最後になりましたが、一つだけ言っておきたいことがあります。大阪アーティスト協会ではユニセフの活動を応援しています。ユニセフの存在自体にはいろいろなご意見もあるのでしょうか？それはちょっと置いておいて、「大阪アーティスト協会は儲かってばかりでええな」なんてたまには言われますが、「我々だって小さいなりに社会貢献してますよ」と言えるようにもしたいですし、実際にはそこまで儲かっている訳ではありませんが、曲がりなりにも営利目的の仕事をしている訳ですから、少しは人の役に立ちたいという事もあり、すべての公演で募金活動をしてユニセフに寄付する、という事を行っています。もちろん個人的にも寄付をしています。多い時には年間100万円くらい集まりますので、それにより社会的な意義を感じていますし、これからも社会貢献を行かなければ、と思っています。

私個人的には、残る人生はもう少ないとは思いますが、これ以外にもやりたいことはたくさんあるので、これからもできることからコツコツとやっていきたいな、と思っています。

日本・アジアのオーケストラ 20年

ウサギがカメに抜かれないように

オーケストラ連盟専務理事 吉井實行

オーケストラ連盟は1990年7月に18団体のプロ・オーケストラが集まって、任意団体として発足した。

2000年4月には10周年を記念して「現代日本オーケストラ名曲の夕べ」(各オケ混成の臨時編成)を開催するまでに至った。この年度のオケ連総覧によると、2000年度に新規入会したセントラル愛知交響楽団を含めて、24団体のオケが加盟している。10年の間に6団体のオケがプロ・オーケストラとして認知されたことになった。

発足当初は正会員、準会員の区分ではなく、2006年に準会員制度が発足し、徐々に加盟オケが増加してきた。

それから、20年後の今年には正会員25団体、準会員16団体、併せて37団体のオケが加盟している。2000年には準会員制度が無かったとはいえ、この20年で何と全国で17のオーケストラが新たに活動していることになる。

沖縄県のオケはまだ加盟していないが、沖縄にも2つの楽団が活動しているので、そう遠くない時期に北は北海道から南は沖縄まで、全国を俯瞰したオケのネットワークが完成することになる。

2007年には語呂合わせで、3月31日を331「ミミにイチバン！オーケストラの日」のキャッチコピーのもと、全国の楽団がイベントを開催し、親しみをアピールする活動も始まった。この活動が示すように、以前はオーケストラの演奏会は何となく敷居が高いような、取扱い難い存在に感じられていたが、楽員のアウトリーチ活動等が盛んになってきて、地域のコミュニティに溶け込むようになってきた。

また、東日本大震災の復興支援を祈念した「音楽の力による心の復興事業」に代表される災害時のオーケストラ像の模索等、社会貢献活動が叫ばれるようになってきた。

この活動では、大震災の津波で統廃合を余儀なくされた、宮城県石巻地区24校の小中学校の校歌を全国21のオーケストラの演奏でCDを作成し、現地に届けることも実現した。

熊本地震では全国のオーケストラ有志による臨時オケを編成し、マーラーの交響曲第2番「復活」、ベートーヴェンの交響曲第9番、ヴェルディの「レクイエム」を3年にわたり演奏し、震災からの復興を祈念した。

このような社会貢献事業は少子高齢化を迎える、これらの時代にますます重要なことが予想される。

最近の傾向としては観客の高年齢化が目立つようになり、以前はメインの定期演奏会は平日の夜に開催するのが当たり前となっていたが、最近は土曜、日曜のマチネー公演が主流となってきた。また、平日のマチネー公演も盛んに行われるようになり、演奏会自体の形態に変化が求められようになってきた。

このような形態の変化のほか、演奏会の曲目にも変化が見られようになり、以前は序曲、協奏曲、メインの交響曲というプログラミングが定番という時代が長かったようと思うが、最近は協奏曲はなしで、交響曲2曲だけ、またはオーケストラだけの演奏と言ったスタイルが多くなってきたように感じるほか、現代曲、隠れた作曲家にスポット

を当てるような企画も多くなってきてている。

このように、20年間に古色蒼然としたオーケストラの活動も徐々に変化し、社会に溶け込んだ存在に変化してきていると言えるだろう。

次は、アジアのオーケストラがこの20年間、どのように変化して来たか、振り返ってみることにする。

オーケストラ連盟は文化庁が主催している「アジアオーケストラウィーク」の企画を2002年からお手伝いしているが、この18年間に延べ47団体のアジア地域のオーケストラを我が国に紹介して来た。2000年当初には高温多湿で発展途上のアジア地域では西洋音楽は馴染みがなく、一部の人たちにより演奏されていたに過ぎなかった。当然市民にも関心がなく、たまに行われる演奏会の観客は駐在している西洋人がほとんどといった状況で、西洋音楽はまったくといったほど、定着していなかった。

しかし、その後の経済発展に伴い、凄まじい勢いで西洋音楽も浸透し、今やほとんどいなかった現地の市民で沸き返る演奏会場に変貌している。

中国には今や78団体のオーケストラが活動し、日本のようにオーケストラの連盟も出来たと聞いている。韓国はそれぞれの自治体が運営するオケが活動している。すでに中国、韓国のオーケストラは世界的な活躍をする楽団も見受けられ、パワーが感じられる。

アセアンのオケもフィリピンには東京フィルに次ぐ100年近い歴史を持つオケが存在したりするが、全体としてはそれほど定着していなかった。音楽学校もあるにはあったが、どちらかというと伝統音楽の教育の方に力が入っていたように思う。

アセアン10各国のうち、カンボジア、ラオス、ブルネイには音楽学校があるようだが、まだオーケストラは存在しない。ミャンマーには軍政時代に中断したオーケストラが数年前に復活し、山本直純氏の次男、山本祐ノ介氏夫妻が指導に孤軍奮闘しているので、これからが楽しみだ。

前述したように、以前はお世辞にも演奏水準、オーケストラに対する姿勢等、改善が必要とされたが、経済発展とともに、都市機能も整備され、市民生活に余裕が生じされてくるに従い、音楽環境の発展も見違えるような様変わりで、目を見張るものがある。

元来、日本人より自己主張をはっきり示し、自己表現にもたけているので、表現する音楽もきちっとした日本人とは異なった表現力が魅力に感じられることが多くなってきた。

この先、アジアの人口は世界の人口の半分以上になるとと言われている。北半球で誕生した西洋音楽もその内、赤道直下のアジア・アセアンでないと聞けない時代がやってくるとも言えない。日本も「ウサギとカメ」のウサギにならないように心して努力しなくてはならない。

音楽プロデューサー協会の活動（例会）（2006年12月～）

※表中氏名はパネラー／敬称略 所属、役職は当時

2006年

- 12月 <演奏会の宣伝、広報のあり方を考える>
 村上雄一 ユーラシック代表
 二木憲司 東京フィルハーモニー交響楽団（チラシでの宣伝）
 佐藤修悦 コンサートサービス代表（チラシ撒きの老舗）
 井坂仁志 アートリンクス代表（広報・広告アドバイザー）
 辻 敏 東京交響楽団（川崎をフランチャイズに独特的活動）
 渡辺 章 浜離宮朝日ホール（新風を吹き込む新企画担当者）
 上野喜浩 すみだトリフォニーホール（独自の企画立案）

2007年

- 2月 <チラシ・プレスリリースの作り方>
 藤田益資 <プレスリリースを見ての「善し悪し」>
 志村嘉一郎 <良いプレスリリースの書き方講座>
 4月 <デジタルオーディオについて～聴衆を獲得してゆくには>
 石塚朝生 日経BP社編集部
 5月 <指定管理者制度について>
 伊藤せい子 SPS取締役事業部長
 中村晃也 すみだトリフォニーホール 事業課長
 中村雅之 横浜市芸術文化振興財団（横浜市能楽堂副館長）
 西田克彦 かつしかシンフォニーヒルズホールマネージャー（指定管理者・東急エージェンシー）
 7月 <現在のコンサートのあり方を考える>
 藤田益資 <会員外も含めた参加者全員で意見交換>
 10月 <チケット販売の今、これから>
 安藤 イープラス
 内海雅史 ホリプロ公演事業部 東京文化チケット担当
 古川力 リンクステーション カスタマサポート部 [Gettii]
 チケットぴあ事業部長
 12月 <コンサート企画の難しさと独自性について>
 嶋村能守 大田区民ホールアプリコ
 遠藤れな 彩の国さいたま芸術劇場
 矢澤孝樹 水戸芸術館
 足立優司 三鷹芸術センター

2008年

- 2月 <ホールの音響について>
 永田 穂 永田音響設計特別顧問
 4月 <教育プログラムを考える>
 田中玲子 フィリアホール
 上野喜浩 すみだトリフォニーホール
 桜井あゆみトリトン・アーツ・ネットワーク
 辻 敏 東京交響楽団
 6月 <教育プログラムを考える 2>
 加藤ケイコ レックス代表
 彌勒忠史 カウンターテナー・公演の企画立案
 10月 <コンサート・プロモーションのあり方を考える>
 志村嘉一郎 <リーマンショック 音楽界への影響>
 南出卓 <ブルーム・アンサンブルのプロモーション例>
 上野喜浩 <すみだトリフォニーホールでの広報宣伝例>
 12月 <公演の企画や鑑賞活動とコミュニティとのリンクについて>
 小林淳一 新潟市民芸術文化会館りゅーとびあ
 足立優司 いわき芸術文化交流館アリオス

2009年

- 2月 藤村順一 兵庫芸術文化センター
 3月 <地域公演主催者が演奏会を続ける事に関して>
 平井満 鶴沼室内楽愛好会・横浜楽友会
 <この50年のクラシック音楽の仕事について>
 藤田益資 クラシック・ニュース プロデューサー
 5月 <公共施設におけるピアノの保守や調律について
 ~スタンウェイピアノの輸入等の歴史>
 外山洋司 松尾楽器商会調理師
 松尾治樹 松尾楽器商会 社長

7月 <広報・宣伝に関しての考察>

「いかに効率よく広告するか」
 「現在行われている広告の方法以外に効果的な方法はないか」

9月 <新規のチケット販売に関して>

CNプレイガイド 松井、カンフェティ 株式、
 東京文化会館チケットサービス（4月から運営会社SPS）小走

11月 <政府の行政刷新会議「事業仕分け」の影響について>

12月 <角川グループ「TICKETS @ TOKYO」という 新規当日券販売のシステムについて（2011年3月終了） <ITとクラシック音楽>

鈴木幸一 インターネットイニシアチブジャパン社長

2010年

- 3月 <ツイッターの使い方と広報宣伝について>
 松本京子 おふいすべが（ツイッター、ホームページ）
 平井 洋 音楽プロデューサー（ブログ、Webミュージックシーン）
 萩生哲郎 ナクソスジャパン（ホームページ、ブログ）
 里神大輔 東京文化会館（利用サービス課）
 岩田美紀 軽井沢八月祭プロデューサー、
 東京・春・音楽祭アドバイザー（ツイッター）
 6月 <混沌としている日本経済の先行き>
 志村嘉一郎 ジャーナリスト
 <集客や宣伝、クラシックに無い発想>
 野際恒寿 北沢タウンホール及び成城ホール館長
 加藤昌史 「演劇団キャラメルボックス」代表
 9月 <デジタルコンテンツの方向とクラシック音楽について>
 佐々木隆一 ナクソスジャパン

2011年

- 4月 <震災の影響について> 情報交換や公演中止などの対応
 6月 <チケット購入時の手数料について>
 里神大輔 東京文化会館
 岩野裕一 音楽ジャーナリスト
 12月 <「フェイスブック」「ツイッター」を中心とした
 webにおける広報宣伝について>
 紺村匡史 外資系広告代理店（株）I&S BBDO グループディレクター
 北風智子 Proximity Japan プランニング・ディレクター
 長門裕幸 ナクソスジャパン デジタル事業部部長
 高瀬 緑 東京交響楽団 広報担当
 南出卓 ミュージックインク代表

2012年

- 10月 <ご自身のお話とオーケストラの現状について>
 吉井實行 オーケストラ連盟常務理事
 12月 <ご自身のお話と合唱界の現状について>
 小林信一 合唱音楽振興会理事

2013年

- 4月 <劇場法について>
 5月 <ご自身のお話とクラシック音楽業界への提言>
 中根俊士 東京アーティスツ代表取締役
 11月 <来年4月の消費増税（5→8%）チケット代について>

2014年

- 2月 <ご自身のお話と日本人の歌手について>
 在原 勝 東京プロムジカ 代表取締役
 6月 <ご自身のお話と「オーケストラがやってきた」>
 村田 亨 テレビマンユニオンエグゼクティブプロデューサー
 12月 <インターネットラジオ>
 演奏会や演奏家とのリンク・協力 宣伝や音源使用 コラボレート等
 斎藤 茂 OTTAVA 取締役ゼネラルマネージャー

2015年

- 3月 <インターネットを利用した広報について>
 兼岩好江 オフィスアルシュ 代表
- 4月 <楽器演奏者が抱えている身体のトラブル、対処法について>
 荻山悟史 スポーツトレーナー
- 6月 <「コストダウン対策」と「ウェブ対策」について>
 樽松大剛 ロングランプランニング代表取締役
- 10月 <マイナンバーが発行されることによる情報管理について>
- 11月 <ご自身のお話と、昔の音楽界について～東日本交響楽団等>
 廣瀬光康 (有)新演奏家協会代表取締役
- 12月 <中小企業・小規模事業者の消費税(転嫁)について>
 中根 健 中小企業庁事業環境部取引課消費税転嫁対策室 対策調査専門職員
 坂本英夫 中小企業庁事業環境部取引課消費税転嫁対策室 対策調査専門職員

2016年

- 3月 「国外事業者行う芸能に関する消費税の課税方式見直し」について
- 6月 JASRAC 担当者説明会
 直前に先方の一方的都合により中止
- 11月 <ご自身のお話、新芸とミリオンコンサート協会>
 小尾 旭 ミリオンコンサート協会代表取締役
- 12月 <指定管理者制度の現状と問題点の報告>
 上野喜浩 トリフォニーホール、梅津知美 パルテノン多摩

2017年

- 1月 <活動と公益と収益との両立、社会貢献について>
 江藤昌子 こぶしクラブ主催
- 4月 <ご自身のお話と、黛、芥川、直純、小澤までも>
 高原加代子 ミリオンコンサート協会
- 5月 <ご自身のお話と、新芸術家協会について>
 寺田有佑 日本アーティスト代表取締役

7月 <CNプレイガイドの新規チケット販売システムについて>

島田知明 (CNプレイガイドシステム事業部営業グループ主任)

9月 <ご自身のお話と音楽業界を外からも見て>

橋本伸一郎 協会事務局長 (株)いちばる代表取締役

12月 <ご自身のお話と音楽業界から離れてみて戻った現状>

村上雄一 協会代表幹事 (株)ユーラシック代表取締役

2018年

- 6月 <クラシックコンサートをつくり、続けていく現状とその後>
 平井 満 横浜楽友会/鶴沼室内楽愛好会代表
- 9月 <すみだトリフォニーホールの新しい挑戦と、コンサートホールの役割>
 上野嘉浩 すみだトリフォニーホールプロデューサー
- 10月 <いち地方都市に見る音楽事情と活動>
 中村由美子 リモージュコンサート代表取締役
- 11月 <ナクソス・ジャパンのデジタル戦略>
 萩生哲郎 ナクソス・ジャパン
- 12月 <SNSを使用した広報について～FB、Twitter、Line>
 星 智 (ほしあきら) エルランディア代表取締役
 <オフィスアルシュの活動とインターネットの活用>
 兼岩好江 オフィスアルシュ代表

2019年

- 2月 <ご自身のお話と関西の音楽界の現状>
 黒川浩明 大阪アーティスト協会取締役会長
- 4月 <ご自身の活動と名古屋の音楽界の現状>
 佐々木仔利子 日本室内楽アカデミー代表
- 9月 <新規展開する当日(前日)券販売のTKTSについて>
 樽松大剛 ロングランプランニング代表取締役
- 11月 <60年に渡る音楽界での活動について>
 藤田益資 クラシック・ニュースプロデューサー

アンナー・ビルスマ逝く
Anner Bylsma

今年多くの著名な演奏家が世を去っていった。

その中で、特に残念だったのはアンナー・ビルスマ(1934.2.17-2019.7.25)である。

彼はバロック・チェロの先駆者で、かつ世界的な名手として知られている。また、室内楽分野では、ガット弦を使用した弦楽アンサンブル「ラルキブデッリ(L'Archibudelli)」を主宰、夫人のヴェラ・ベス(ヴァイオリン)、ユルゲン・クスマウル(ヴィオラ)らとともに、バロック時代からロマン派までの室内楽作品を幅広く取り上げ演奏している。

チェロ奏者としては、J.S.バッハの無伴奏チェロ組曲を2回録音している。1回目は自分の楽器であるゴッフリーラーを使用し、2回目はスミソニアノ博物館が所有している、ストラディヴァリウス・セルヴェという楽器である。

両方とも第6番は自分のチェロピッコロで演奏している。

どちらの演奏が良いかという話になると、人それぞれ好き好きがあるので断定できないが、私は断然初めに入れた演奏が良いと思っている。

ラルキブデッリについてはどうしても招聘したかったが、なかなかチャンスに恵まれず、1997年によくやく実現した。

その演奏は予想をはるかに超えていた。

ビルスマは「弦楽四重奏はオーケストラで、室内楽は三重奏まで」と言っていた。

確かに言われてみるとその言葉を理解できる。

ペトーヴェンやシューベルトの弦楽トリオは実に名演で、モーツァルトのディヴェルティメントK.563もそれに勝る演奏である。

以来、他の演奏も聴いてみたが彼らを凌ぐ演奏には未だにあってない。

ビルスマはある雑誌のインタビューで、古楽の知識のないインタビュアーにトリオの成功の秘訣はと聞かれて「まず、初めに左利きのヴィオリ

ストを見つけることだ」とバカにしたような答えをしている。

彼はバッハの無伴奏チェロ組曲に関して、フェンシングマスターという本を書いている。

第1番から第3番までに関しての演奏解釈の本である。

だが、その後考えが進化してその本の増刷をやめてしまった。

2016年にアンナー・ビルスマ/渡邊順生・著『バッハ・古楽・チェロ』アンナー・ビルスマは語る『加藤拓未・編訳(アルテスパブリッシング)』を出版した。この中にバッハの無伴奏チェロ組曲に関してのビルスマの演奏解釈が載っている。実際に良い本で演奏家やそれを目指している方には是非読んで欲しいと思う。

また、付録としてビルスマと親交の深かった、音楽評論家の佐々木節夫さんの追悼演奏会の未発売のCDが付いている。

彼は来日すると横浜桜木町のホテルに滞在していた。時間があると散策し古道具屋に入って買い物をし、町の食堂の人と顔馴染みになっていた。大変気さくで冗談の好きな人でみんなに愛されていた。

バッハの組曲の演奏会をすると、アンコールは聴衆のリクエストで決めていた。

もう一度日本に来て欲しかったが、ついにその夢が叶わぬうちに逝ってしまった。残念な話である。

[注:クスマウルは左利きのヴィオリリスト]

(2019.12.30, 記) 中根俊士

強い光を放つ存在に

音楽プロデューサー協会事務局長 橋本伸一郎

小学校の音楽教室に始まって、大学オケ時代のリハーサル室の利用、仕事をするようになって、そこが仕事における最も大事な場所として幾度となく通い、それもホワイエでなく上野駅の公園口からまっすぐの楽屋口。

しかし、ある時期からめったに入らなくなつたその入り口。誘われて久しぶりに、これまであまり利用機会の無かった4階の会議室に向うためぐった東京文化会館の楽屋口は、気持ちよそよそしさを感じました。音楽プロデューサー協会例会。多分、2008年2月だと記憶しています。

2007年に独立し、仕事を進める中、業界を離れていた14、5年のブランクは大きく不安な船出でした。

そのような時、梶本音楽事務所の大先輩であり仕事のイロハを教えて頂いた薮田さん、中根さんのお説いを受け、音楽プロデューサー協会（プロ協）の勉強会に幾度か伺い、2013年の新年会に参加したことをきっかけに勢いで入会しました。

ひと月に一度の勉強会。勉強会もさることながら、時折交わされる取り留めのない情報交換、戦後のクラシック業界の変遷、企画アイデア等々。そうしたお話しや、一人で仕事する我身には大きな刺激となりました。そして、それ以上に人の出会いは貴重な宝でした。

音楽プロデューサー協会はいわゆる業界団体とは一線を画した、日本のクラシック音楽の世界に志を持って活動する者の同志会のような存在を感じています。私の様な小さな事業者にとりまして、心の支えであり、その世界の窓のような存在です。

音楽プロデューサー協会の20年の歴史において、入会5、6年の何にも貢献していない私が、2018年より事務局長を仰せつかり、微力ながら何とか会員の皆さまの親睦とご要望の集約に努めさせて頂いております。

私がそうであったように、クラシック音楽に魅せられて、厳しい環境の中、地道に事業を展開する同志の新たな加入は、さらにお互いの心の支えとなります。

音楽プロデューサー協会が20年を経た今、より一層親睦の輪が広がり、プロ協がより強い光を放つ存在になるよう会員の皆さまと団結まいりたいと思っております。

2020年1月 音楽プロデューサー協会発行 編集:志村嘉一郎 デザイン:梅津知美
音楽プロデューサー協会会員

上野喜浩	元すみだトリフォニーホール プロデューサー
梅津知美	元(公財)多摩市文化振興財團 音楽プロデューサー
江藤昌子	こぶしくらぶ主宰 プロデューサー
兼岩好江	オフィスアルシュ 代表
博松大剛	ロングランプランニング(株) (カンフェティ) 代表取締役
黒川浩明	(有)大阪アーティスト協会 取締役会長
向後由美	せきれい社「サラサーテ」編集部
小林信一	(一財)合唱音楽振興会理事
斎藤茂	OTTAVA(株) 取締役 ゼネラルマネージャー
佐々木真二	(公財)横浜市芸術文化振興財團 (横浜みなどみらいホール)チーフプロデューサー
佐々木仔利子	(特)日本室内楽アカデミー 理事長
志村嘉一郎	ジャーナリスト、元浜離宮朝日ホール支配人
寺田有佑	(株)日本アーティスト 代表取締役
中根俊士	(株)東京アーティスツ 代表取締役
中村由美子	リモージュコンサート(株) 代表取締役
野島友雄	(株)タクトミュージック プロデューサー
萩生哲郎	ナクソス・ジャパン(株) デジタル事業部
橋本伸一郎	(株)いちべる 代表取締役
原 浩之	(株)白寿生科学研究所 取締役副社長 Hakuju Hall 支配人

平井 满	横浜楽友会/鶴沼室内楽愛好会 代表
松崎三恵子(株)	シド音楽企画 代表取締役
松本京子(有)	おふいすべガ 取締役
丸田 朗(有)	マルタミュージックサービス 代表取締役
村上雄一(株)	ユーラシック 代表取締役
村田 亨(株)	テレビマンユニオン エグゼクティヴプロデューサー
薮田益資	クラシック・ニュース プロデューサー
吉井實行(公財)	オーケストラ連盟 専務理事
吉岡志真(株)	たつみ 取締役

代表幹事	村上雄一
幹事	上野喜浩 梅津知美 中根俊士 中村由美子 橋本伸一郎 丸田朗
監査	平井满
参与	薮田益資
事務局長	橋本伸一郎

音楽プロデューサー協会
〒165-0033 東京都中野区若宮 2-33-5
TEL:050-3337-7639 FAX:03-5373-7760
E-mail:info@ichibell.net (株)いちべる内

2020年1月現在